

「種蒔きのたとえ」

ルカの福音書 8:4~15

はじめに

鳥類の中には、孵化して最初に見た動く物を親と認識するインプリンティング（刷り込み）という性質を持つものがあります。たとえそれが人や他の動物であっても、または車のような機械であっても、そのヒナは最初に見た動くそれを親だと認識して、後をついて行くようになるのです。そういえば昔、息子がまだ幼かった頃、保育園で恐竜の名前を間違えて覚えてきて、それを正そうとしても「だって先生がそう言ったもん！」と言って聞かなかったことがあります。このように最初に見るもの、最初に聞く情報の影響力は動物にとっても人にとっても絶大です。生物の脳はたいてい最初に受け取った情報を基準にして、次の情報を処理、判断します。つまり最初の情報はたとえ間違っていたとしても吟味されることなくほとんど無条件で受け入れられてしまうのです。しかし新しい情報は最初のそれと異なっている場合、たとえ正解であってもすんなりとは受け入れられず、時間をかけて繰り返して入れなければ拒絶されます。偏見、先入観、既成概念などはまさにその産物で、今日私が述べようとしている内容はおそらく皆さんのそれに引っ掛かります。特に今回は非常に有名なイエシュアのたとえ話だけにそれがより大きいかと思います。しかし私が重要視しているところは聖書をどう解釈するかということよりも、いかにして「神の国」の福音を伝えるかということですので、その点を踏まえた上で最後まで聞いてくださればと思います。お互いに聖霊の助けがありますように。

1. 集める

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:4 さて、大勢の群衆が集まり、方々の町から人々がみもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。

冒頭のこの一文は非常に重要です。これは決してただの状況説明などではありません。しかしこの日本語訳では誤解が生じます。それはまるで人々が自発的に自分の意思でイエシュアのみもとに集まって来ているように受け取れてしまうからです。しかしここに使われている「集まる」という意味のヘブル語アースフ(אָרֶסַף)は本来、このような意味で使われた言葉です。

創世記【新改訳 2017】

6:21 あなたは、食べられるあらゆるものから採って、自分のところに集め、あなたとそれらの動物のための食物としなさい。」

6:22 ノアは、すべて神が命じられたとおりにし、そのように行った。

これは神がノアに命じられたものです。「自分のところに集め…なさい」とノアに命じられたものです。食物に向かって「各自ノアのところに集まりなさい」とは命じられてはいません。このように、アースフとは本来、集まる、ではなく「集める、集められる」という収穫的な意味の言葉なのです。神のご計画は

イエシュアのみもとに集まって来る人々を救うことではなく、イエシュアがアーサフ「集める」人々を救うという、神の側の選びに基づくものです。「集まる」と「集める」は一字違いですが意味が全く違います。皆さんは自分で福音を聞いて信じたから救われるのではありません。神に選ばれ、福音のみことばが与えられ、それに伴う信仰が与えられたゆえに神を信じたのです。そして、やがて来られるイエシュアがそのみもとにアーサフ、集めてくださることによって救われるのです。

そしてイエシュアはお集めになった人々に「たとえを用いて話された」ともありますが、これにも重要な意味が秘められています。ヘブル語で「たとえ」のことをマーシャル(**למשל**)といいます。同じ綴りでマーシャル(**למשל**)と読むと「支配する、治める」という意味になり、しかもそれは本来「昼と夜を治める(創世記 1:18)」こと、つまり光と闇を支配する、裁く、絶対の権威者としての神を指す言葉なのです。イエシュアがなぜ多くのマーシャル、たとえを話されるのかという理由がここにあるのです。ですからこの「大勢の群衆が集まり…みもとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された」という一文は、「主イエシュアがその権威によってお選びになった人々をみもとに集め、王として治める」という神のご計画を秘めた一文であるということなのです。

2. 奥義

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。

8:6 また、別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。

8:7 また、別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。

8:8 また、別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」イエスはこれらのことを話しながら、大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

8:9 弟子たちは、このたとえがどういう意味なのか、イエスに尋ねた。

8:10 イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。

「神の国の奥義」、イエシュアはこの言葉をこの種蒔きのたとえを語られ、弟子たちがその意味を尋ねた時にのみ用いておられます(マタイ 13:11、マルコ 4:11)。「奥義」のことをヘブル語ではソード(**סוד**)といい、それは初め「密議」つまり秘密の会議、隠れた集い、というような意味で記されました。

創世記【新改訳 2017】

49:5 シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の武器。

49:6 わがたましいよ、彼らの密議に加わるな。わが栄光よ、彼らの集いに連なるな。彼らは怒りに任せて人を殺し、思いのままに牛の足の筋を切った。

49:7 のろわれよ、彼らの激しい怒り、彼らの凄まじい憤りは。

ヤコブすなわちイスラエルの息子「シメオンとレビ」、彼らの「**密議**」という言葉が聖書で最初のソードです。しかし父ヤコブはこれを「**のろわれよ**」と預言しています。シメオンとレビが殺し、また切ったもの、それはイスラエルの民につながり、イスラエルの民になることを望んだヒビ人、すなわち異邦人でした（創世記 34 章）。神のご計画はイスラエルにつながる異邦人を、イスラエルによって地上のすべての民族を祝福することにありました（創世記 12:3）。だから彼らのソードはのろわれたのです。つまり正しいソード「**密議**」すなわち本来の「**奥義**」とは、イスラエルとそれにつながる異邦人がみな救われて「**神の国**」に入ること指し示しているのです。

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた」というくだりから始まるこのたとえは、多くの場合、種である神のみことばを受け取る側の人の心、態度、姿勢を表すものとして理解されています。つまりみことばをよく聞いて生長し、実を結ぶ者となるためにがんばりましょう、そのために教会に集い、礼拝し、聖書のみことばを聞き、また読み、学び、賛美し、祈り、福音を伝え、主に仕えましょう、というような促し、勧め、励ましのメッセージとして用いられてきました。しかし、このたとえにはもう一つ別の側面があり、「**神の国の奥義**」とあるように、「**神の国**」がどのようにして建てられるのかという神のご計画を説明するものでもあるのです。しかしそれは「**見ても見ることがなく、聞いても悟ることがない**」とあるように、人の理解を越えたもの、つまり人の力や知恵、言動によって左右されない、ただ神の御手によって成される、まさに神による神のご計画について、ここにはたとえられてもいるのです。それではそれが一体どのようなものであるかを見てまいりましょう。

3. 道端

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:11 このたとえの意味はこうです。種は神のことばです。

8:12 道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。

「道端」はヘブル語でデレフ(דֶּרֶף)といい、本来はエデンの園に植えられた、いのちの木へと至る「道」を指し示す言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への**道**を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

一方「**落ちた**」「**落ちる**」という意味のナーファル(נָפַל)は本来「深い眠り」、「死」を意味する言葉です（創世記 2:21）。つまり「道に落ちる」とは、死からいのちへと至ること、「復活」を指し示すとえなのです。そしてその復活する種である神のみことばとは、もちろんイエシュアのことです（ヨハネ 1:1）。このイエシュアの死と復活、すなわちイエシュアが私たちの罪の身代わりとして死んでくださったこと、しかし三日目によみがえられたこと、この事実を信じ受け入れる者は誰でも救われます。しかしこのイエシュアの死と復活を信じない者、これを拒絶し「**踏みつけ**」るような者は、誰も救われません。その絶対

の掟、基準がまずここには示されているのです。ですから今一度確認します。あなたはイエシュアの死と復活を信じていますか？信じる者はアーメンと言ってください。

4. 岩の上

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:13 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。

この「岩」のことをヘブル語でセラ(צֶלֶק)といい、民数記 20 章にその最初の言及があります。

民数記【新改訳 2017】

20:7 【主】はモーセに告げられた。

20:8 「杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。彼らのために岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませよ。」

20:9 そこでモーセは、主が彼に命じられたとおりに、【主】の前から杖を取った。

20:10 モーセとアロンは岩の前に集會を召集し、彼らに言った。「逆らう者たちよ。さあ、聞け。この岩から、われわれがあなたがたのために水を出さなければならないのか。」

20:11 モーセは手を上げ、彼の杖で岩を二度打った。すると、豊かな水が湧き出たので、会衆もその家畜も飲んだ。

このようにセラは本来、水を出すために神に「逆らう者たち」に打たれた「岩」を指すのです。そしてその上で種は「生長した」すなわち「みことばを聞くと喜んで受け入れる」とあり、これは十字架によって打たれた、死なれたイエシュアという岩の上に建てられた、私たち教会を表しているのです。

そしてさらにこれには「根がない」とあります。この「根」のことをヘブル語でショーレシュ(שֹׁרֶשׁ)といい、その最初の言及は申命記 29 章にあります。

申命記【新改訳 2017】

29:18 万が一にも、今日その心が私たちの神、【主】を離れて、これらの異邦の民の神々のもとに行って仕えるような男、女、氏族、部族があなたがたのうちにあってはならない。あなたがたのうちに、毒草や苦よもぎを生じる根があってはならない。

このように「根」ショーレシュは本来、「苦よもぎを生じる根」のことであり、それは「その心が私たちの神、【主】を離れて、これらの異邦の民の神々のもとに行って仕えるような」こと、偶像礼拝を指すのです。つまりイエシュアが言われた「根がない」とはその逆、すなわち主から離れることがない、偶像に仕えることがないという意味なのです。

そしてそれはやがて「枯れてしまった」とあります。ここにはヤーヴェーシュ(צְבִי)が使われており、本来それはこのような出来事で記されました。

創世記【新改訳 2017】

8:3 水は、しだいに地の上から引いていった。水は百五十日の終わりに減り始めた。

8:6 四十日の終わりに、ノアは自分の造った箱舟の窓を開き、

8:7 鳥を放った。すると鳥は、水が地の上から乾くまで、出たり戻ったりした。

このように、ヤーヴェーシュは「地の上から乾く」つまり地の上から干上がる、地から消えていなくなるという意味の言葉なのです。そしてイエシュアはこれを「しばらくは信じていて…試練のときに身を引いてしまう、そのような人たち」と説明しています。ここで「身を引いて」という箇所に使われているスーグ(גִּיּוּ)もまた「地を移る、地を離れる(申命記 19:14)」という意味の言葉なのです。つまり「試練のときに」私たち教会はこの地上から干上がる、つまり空中に上り、いなくなる、地を離れるということがたとえられており、それは世の終わりに地上に訪れる大きな患難の時に、私たち教会は天に引き上げられる、携挙される(1テサロニケ 4:16~17)、という神のご計画がたとえられているのです。

5. 茨の中

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:14 茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快楽でふさがれて、実が熟すまでになりません。

「茨」ヘブル語のコーツ(קִצִּי)の最初の言及は以下の記述です。

創世記【新改訳 2017】

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

このように、人が神以外のものの声に聞き従い、神の命令に背いたことでこの地に「茨」コーツが現れました。「野の草を食べ」ようするとこれが邪魔をして「苦しんで…食を得る」という、そのような人の一生を意味するものがこのコーツです。神の御言葉である種は、この中にあっても失われてはいませんが、おおわれ、隠されてしまっています。以下にこの「茨」を用いたこのような預言があります。

ホセア書【新改訳 2017】

10:8 イスラエルの罪であるアベンの高き所は滅ぼし尽くされる。茨とあざみが彼らの祭壇の上に生い茂る。彼らは山々に向かって「私たちをおおえ」と言い、丘に向かって「私たちの上に崩れ落ちよ」と言う。

このように「茨」とは「イスラエル」の「上に生い茂る」また彼らを「おお」っている存在であり、それゆえイスラエルに対する神のご計画が隠されている、彼らの目に覆いがかかっていることをイエシュアは

この「茨」を用いてたとえられたのです。まさに「『彼らが見ていても見ることなく、聞いていても悟ることがないように』」とあるとおりです。

そしてこの「茨」は、ただ覆い隠すというだけではなく、やがて黙示録の獣、反キリストという形でイスラエルを苦しめ、潰しにかかります。こう預言されています。

エレミヤ書【新改訳 2017】

12:12 荒野にあるすべての裸の丘の上に、荒らす者が来た。【主】の剣が、地の果てから地の果てに至るまで食い尽くすので、すべての肉なる者には平安がない。

12:13 小麦を蒔いても、茨を刈り取り、労苦しても無駄になる。あなたがたは、自分たちの収穫で恥を見る。【主】の燃える怒りによって。」

12:14 【主】はこう言われる。「わたしの民イスラエルに受け継がせたゆずりの地に侵入する、悪い隣国の民について。見よ。わたしはその土地から彼らを引き抜き、彼らの間からユダの家も引き抜く。

12:15 しかし、彼らを引き抜いた後、わたしは再び彼らをあわれみ、彼らをそれぞれ自分のゆずりの地、あるいは自分の土地に帰らせる。

このように「荒らす者」獣と呼ばれる反キリストが「イスラエルに受け継がせたゆずりの地に侵入」し、これを奪います。しかし主はその後イスラエルを「わたしは再び彼らをあわれみ、彼らをそれぞれ自分のゆずりの地、あるいは自分の土地に帰らせる」ともあります。それはどのようにしてか、同じく「茨」を用いた預言にこうあります。

詩篇【新改訳 2017】

118:10 すべての国々が私を取り囲んだ。しかし【主】の御名によって私は彼らを断ち切る。

118:11 彼らは私を取り囲んだ。まことに私を取り囲んだ。しかし【主】の御名によって私は彼らを断ち切る。

118:12 蜂のように彼らは私を取り囲んだが茨の火のように消された。【主】の御名によって私は彼らを断ち切る。

イザヤ書【新改訳 2017】

33:12 諸国の民は焼かれて石灰となり、刈り取られて火をつけられる茨となる。」

エゼキエル書【新改訳 2017】

28:24 「イスラエルの家には、彼らを侮ったすべての周囲の者たちが突き刺す茨も、痛みを与えるとげも再び臨むことはない。そのとき彼らは、わたしが神、主であることを知る。」

このように、最後にはこの「茨」獣に率いられた「すべての国々」「諸国の民」イスラエルを「侮ったすべての周囲の者たち」は焼き尽くされ、取り除かれ、その土地すなわちイスラエルは「わたしが神、主であることを知る」者となり、次にたとえられた「良い地」となります。これらの出来事はすべて、イエシュアの地上再臨の時に成就するのです。

6. 良い地

ルカの福音書【新改訳 2017】

8:15 しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。

「良い地」とは何でしょう。どのような土地でしょう。それは砂利や雑草などの不要なものがすべて取り除かれ、またよく耕され、水や肥料などによって水分と養分が豊かな土地です。では土地は自分で自分をこのような状態にすることができるのでしょうか？ イエシュアはここで人を何にたとえておられますか？ それは種を蒔く者でも、耕す者でも、刈り取る者でもありません。ここでは私たち人を土地にたとえておられるのです。

土地は自分で種を蒔くことはもちろんのこと、自分で砂利や雑草を取り除くことも、耕すことも水や肥料を与えることもできません。土地は、すなわち人は自分では何もすることができないのです。「良い地」は農夫がそこにいることによって、農夫である神によって、主イエシュアによって、イエシュアがともにおられることによって、ただこの御方によってのみ造られるのです。ですからイエシュアは決してあなたは自分でがんばって「良い地」になって百倍の実を实らせよ、などという無理難題を人に押し付けておられるのではないのです。すべては神によってのみ成し遂げられる神のご計画なのです。そしてこの「良い地」は先ほども述べたように、この地から教会が携拳され、「茨」である覆いが、反キリストが焼き尽くされた後に現れるものであり、それはもちろん千年王国、メシア王国とも呼ばれる「神の国」を指し示しているのです。そしてこの御国の民はみな「立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます」。「神の国」においてのみ、このたとえに示された状態は成し得ることができるのです。

最後に「良い」という言葉について。ヘブル語のトーヴ(בֵּיט)がそれですが、テット(ט)、ヴァーヴ(ו)、ベート(ב)の三つの文字からなるこの言葉は、それぞれの象形に秘められた意味を合わせると

文字	ב	ו	ט
形	家	釘	回る(剣)
意味	家、家族、国、国民	天から地に下る、 結ぶ、定める	苦痛を通して回心、 回帰、回復する

「大きな患難を経て神に立ち返り、天から来られるイエシュアと繋がり、ともに地に打ち建てられる御国に入る」というイスラエルの民の姿が、そのようになされる神のご計画が表された言葉、それが「良い」という意味の言葉、トーヴであり、「良い地」とは「神の国」がこの地に建てられることが示されているのです。

この「種蒔きのたとえ」はこれまで、私たち教会が今どうあるべきか、今、私が、何をすべきかということを考えさせ、より良い生き方を目指すよう励まし、促すものでした。そのような教えにより、福音が全世界に宣べ伝えられ、教会の数は増えました。しかし「神の国」は教会の数や質によってもたらされるものではありません。イスラエルによってもありません。もちろん神は人を用いられますが、その人の数や能力を頼みとしません。何度でも言いますが「神の国」は神のご計画であり、ただ神によって、神の御子主イエシュアによってのみ成就、実現、完成するものなのです。今日のたとえの解釈からぜひその真理を覚えていただきたいです。そしてそのみことばの成る日を思いめぐらし、慕い求め、いつも「主イエシュアよ、来てください」と祈り続ける者であっていただきたいと願います。